

研究論文

# 留学経験の有無は、日本語学習者の日本語使用に どのような影響を与えるのだろうか？

—韓国語学習者の接続表現の使用をめぐる—

大野 陽子・松岡知津子

## What are the differences in the use of Japanese language between the learners who had experience of studying in Japan and those who didn't? Focus on the use of connection expression by Korean Learners

OONO Yoko, MATSUOKA Chizuko

### 〈Abstract〉

The purpose of this research is to clarify the difference in the use of Japanese language between the learners who had experience of studying in Japan and those who didn't. In this research, we focused on the use of connection expression in Japanese and analyzed the use tendencies between Japanese learners in South Korea and Japanese native speakers.

We divided learners into three groups as follows; learners who had the experience of studying in Japan for over one year, learners who had the experience of studying in Japan for under one year and learners who had no experience of studying in Japan at all. We compared the writing data among these three groups and a group of Japanese native speakers.

We found that the learners' use of "te-form" which express attendant circumstances and "node" which express the reason, may be processed through the U-shaped change to become more and more like the use tendencies of Japanese native speakers. However, other connection expressions do not show the same results. Due to the small sample we based our research on, we conclude that more research is necessary in the future.

キーワード：韓国語学習者、JSL、JFL、接続表現

### 1. はじめに

言語学習者は、言語を勉強する上で何を最終的な目標とするのだろうか。学習目的や学習動機によってその目標は違おうだろうが、学習言語の母語話者のように話したり書いたりできるようになりたいという目標を掲げる言語学習者は多いのではないだろうか。

例えば、日本語母語話者のように日本語が操れるようになるということは、ある状況下で日本語母語話者の多くが使用するような語彙を使用し、日本語母語話者の多くが用いる表現が使えるようになることを意味する。しかし、日本国外で学習言語を学んでいる場合、日本語教師以外の日本語母語話者からの自然なインプットを得る機会は限られている。そ

のため、日本語母語話者のように学習言語が操れるようになることを日本留学の理由のひとつとして掲げる日本語学習者は一定数いるのではないかと思う。

しかしながら、これまでに行なわれてきた日本語学習者（以下、学習者）を対象とした研究では、留学経験の有無によって、学習者の日本語使用が日本語母語話者（Japanese Native Speaker、以下、JNS と略す）のそれに近づいていくのか否か、また、留学経験のある学習者と留学経験のない学習者とでは、日本語使用にどのような違いが見られるのかなどといったことは十分に明らかになっていない。

そこで、本研究では、JNS と学習者の書き言葉をデータとして用い、両者の日本語使用状況を調査・分析し、留学経験の有無によって、学習者の日本語使用がどう異なるかを明らかにしていく。その中でも、今回は、接続表現に焦点をあて、その使用状況を明らかにしたい。留学経験の有無によって接続表現の使用状況がどう違うかを明らかにすることで、将来的には、留学経験の有無という環境の違いが、日本語学習にどのような差を与えるのかということを考える一助になるのではないかと考えている。

本研究で焦点をあてる接続表現は、文と文をつなぐだけでなく、前文と後文の関係を表す役割も持っているため、接続表現を用いた文を産出する際、話し手（または書き手）の考えやものごとの見方が表れやすい部分だと言える。つまり、学習者の接続表現の使用状況と JNS のそれが似ていれば、その学習者は JNS のように日本語が使えることを意味していると考えられる。そのため、接続表現の使用状況を分析すれば、留学経験が学習者の日本語使用に与える影響の一側面が明らかになるのではないかと考えている。

## 2. 先行研究

日本語を学ぶ環境は、日本で日本語を学ぶ環境（Japanese as a Second Language、以下、JSL と略す）と日本以外の国で日本語を学ぶ環境（Japanese as a Foreign Language、以下、JFL と略す）の大きく二つに分けられる。日本語の学習環境の違いによる学習者の日本語使用に焦点を当てた研究としては、前文を見せて後続文を予測させる能力を測ったもの（津留崎他 1997）や、指示詞（孫 2005）、縮約形の使用状況（東 2008）、あいづちとうなずきをテーマにしたもの（Miyazaki 2010）、プラグマティックスと文法の間違いに対する学習者の意識を探ったもの（Takamiya 2010）などがあるが、JSL と JFL のどちらが学習者の日本語使用にとってよい学習環境かという点においては一貫した結果は出ていない。

村上他（2006）は、JNS と上級学習者に4コマ漫画のストーリーテリングをしてもらった発話データをもとに上級学習者の接続表現を分析している。そして上級学習者の接続表現の使用は JNS のそれに近づいているように見える一方で、逆接の場面接続における接

留学経験の有無は、日本語学習者の日本語使用にどのような影響を与えるのだろうか？

続詞以外の表現の習得が不十分であることを指摘している。峯（2007）では、KY コーパスと上村コーパスをデータとして用い、JNS の接続辞使用状況を調べ、学習者の接続辞の正用数と正用使用者数を算出している。また、学習者の母語別、言語レベル別の正用使用者数を分析することで、接続辞の正用率が言語処理の発達段階に沿って上がっていくことを示している。しかし、両者とも JSL と JFL の学習者による言語データを分析したものではないため、学習環境が学習者の接続表現の使用にどのような影響を与えているかといった点は明らかになっていない。

そこで本研究では、次の 2 点を研究課題とする。

- (1) 日本への留学経験がある学習者と留学経験がない学習者の接続表現の使用状況には、どのような共通点および相違点があるのだろうか。
- (2) 学習者に留学経験がある場合、接続表現の使用状況は JNS のそれと似ているのだろうか。

### 3. 調査方法

3-1 では、本研究で用いた JNS と学習者のデータ取得方法について、3-2 ではデータの分析対象である接続表現について述べる。

#### 3-1. データ取得方法

学習者のデータは、韓国慶尚北道にある大学の人文学部日語日文学科 2 年生と 3 年生の協力を得て取得した<sup>i</sup>。また、JNS のデータは、三重大学の日本人学部生の協力を得た<sup>ii</sup>。

データ取得にあたり使用したものは『THE BEST OF PINGU』というクレイアニメの DVD である。この DVD から、2 話、4 話、5 話の全 3 話を 1 話ずつ見てもらい、その後、それぞれの話が終わるごとに、ストーリーの場面を区切った静止画を並べプリントした紙を配布した。そして、静止画がどのようなシーンであるかの説明を書くようにという指示を、学習者には韓国語で、JNS には日本語で行なった。学習者及び JNS が書き込む時間に制限は設けなかった。調査機関等の詳細は以下のとおりである。

調査要旨：まず、動画をスクリーンに映し出し、1 度視聴する。その後、場面ごとに 10 ～ 13 シーンに区切った静止画を提示、静止画の横に日本語で状況説明をさせる。

調査期間：日本人大学生 2011 年 7 月～ 11 月、韓国人大学生 2011 年 3 月

調査に用いた動画：DVD 『THE BEST OF PINGU』。PINGU 語という実在しない言語を話すペンギンの家族の話。一話完結型。

動画選定の基準：4 人（匹）以上登場し、ストーリーが把握しやすいこと。

### 3-2. 分析対象

本研究では接続表現を分析対象としているが、本研究では峯 (2007) で用いられた定義に従い、分類を行なった。峯 (2007) で用いられている定義は、以下の通りである。

- (1) 連用節を形成しているもの。
- (2) 主節が後続していないもので、ケド、カラ、テで終わるもの。
- (3) 「そしたら」「できれば」などの接続詞や、「しなければならない」「しないといけない」「してもいい」のようなモダリティ表現の一部と考えられるバ、ト、テモは分析対象から外す。

## 4. 分析結果

4-1 では、日本への留学経験がある学習者とない学習者の接続表現について、その使用状況を述べる。4-2 では、学習者が使用する接続表現の使用状況と JNS のそれとを比較した結果を述べる。4-3 では、学習者と JNS の使用頻度が高かった接続表現について述べる。

### 4-1. 学習者の接続表現の使用状況

【表1】は、学習者の各グループと JNS が用いた接続表現の詳細と、正しく使用された接続表現の使用頻度を、【表2】は【表1】を A 類、B 類、C 類に分類し、1人あたりの使用頻度を算出したものである。「留1」は日本での留学経験が1年以上ある学習者、「留2」は留学経験が1年未満の学習者、「留なし」は留学経験がない学習者のことである。A 類、B 類、C 類というのは、言語レベルが上がるにつれ、接続表現が「句」→「文」→「複文」の順で正用率が上がっていくと述べた峯 (2007) の分類に基づいたものである。峯 (2007) では、A 類は句の階層で処理を必要とする従属節を、B 類は複文の階層で処理を必要とする従属節を、C 類は文の階層で処理を必要とする従属節を示している。なお、本研究では、明らかに誤用であると判断できる接続表現については分類の対象から外した<sup>iii</sup>。

留学経験の有無は、日本語学習者の日本語使用にどのような影響を与えるのだろうか？

【表 1】 学習者と JNS が用いた接続表現の使用頻度（回）

	接続表現	留 1 (10 人)	留 2 (11 人)	留なし (13 人)	JNS (9 人)
A	V ため (目的)	5	1	3	3
	そばから (継起)	1			
	て (継起)	22	23	27	37
	て (副詞句的)	1	1		
	て (付帯)	23	10	18	33
	ないで	2	1	2	7
	ながら	9	4	9	3
	まま (付帯)	3			
	ようと (副詞句的)	2			4
	連用 <sup>iv</sup> (継起)			3	22
	連用 (付帯)			2	3
A 類の接続表現の合計		68	40	64	112
B	あいだ		4	1	3
	あと		2	1	1
	うちに				4
	たら	6	1	6	3
	て (継起)	3	2		2
	て (理由)	33	36	41	37
	てから		1	3	
	ても	4	1	5	3
	と	4	2	1	11
	とき	1		2	3
	とたん			1	
	とちゅう	1			
	なくて	1	2		1
	ので	12		6	27
	のに			1	4
	まえに	2		1	3
	まで	1	1		
	までに				3
	ように (目的)	2	1	3	2
	連用 (継起)			1	4
連用 (理由)	1	1	6	23	
B 類の接続表現の合計		71	54	79	134

C	が	10	11	8	11
	けど	6	2	2	1
	けれども		2		
	から	1	3	2	1
	し	2	2	1	3
	て (並列)	6	1	1	5
	連用 (並列)			1	6
C 類の接続表現の合計		25	21	15	27
A ~ C 類の合計		164	115	158	273
1 人あたりの使用頻度		16.4	10.4	12.1	30.3

【表2】 A 類、B 類、C 類の 1 人あたりの接続表現の使用頻度 (回)

	留 1 (10 人)	留 2 (11 人)	留なし (13 人)	JNS (9 人)
A	6.8	3.6	4.9	12.4
B	7.1	4.9	6.0	14.8
C	2.5	1.9	1.1	3.0
合計	16.4	10.4	12.0	30.2

【表1】における各グループの1人あたりの使用頻度を見ると、「留1」は16.4回、「留2」は10.4回、「留なし」は12.1回で、「留2」→「留なし」→「留1」の順で多くなっていることがわかる。また、【表2】から、A類の1人あたりの使用頻度は「留1」は6.8回、「留2」は3.6回、「留なし」は4.9回となっている。B類では、「留1」が7.1回、「留2」が4.9回、「留なし」が6回、C類では「留1」が2.5回、「留2」が1.9回、「留なし」が1.1回となっており、A類とB類では「留2」→「留なし」→「留1」の順で、C類では「留なし」→「留2」→「留1」の順で多くなっていることがわかる。

A類、B類、C類で、どの接続表現が最も多く使われているかを【表1】から見ると、A類の「留1」では付帯状況を表す「て形」(23回)、継起を表す「て形」(22回)が群を抜いていることがわかる。「留2」では継起を表す「て形」(23回)、付帯状況を表す「て形」(10回)が、「留なし」でも継起を表す「て形」(27回)、付帯状況を表す「て形」(18回)が多いことがわかる。

B類の「留1」では理由を表す「て形」が33回と最も多く、次に「ので」が12回使われていることがわかる。「留2」でも理由を表す「て形」が最も多く使われている(36回)が、その他の接続表現は1~4回の使用頻度である。「留なし」でも理由を表す「て形」が41

留学経験の有無は、日本語学習者の日本語使用にどのような影響を与えるのだろうか？

回と最も多く使われているが、次に多く使われている「たら」「ので」（それぞれ6回）とは大きくかけはなれていることがわかる。

C類の「留1」では逆接の「が」が10回、次いで逆接の「けど」と並列の「て形」がそれぞれ6回使われている。「留2」では逆接の「が」が11回使用されているが、その他の使用頻度はそれほど高くない。「留なし」でも逆接の「が」が最も多く使われている（8回）が、その他の使用頻度はそれほど高くないことがわかる。

#### 4-2. 学習者とJNSの接続表現の使用状況

【表1】によると、JNSの接続表現の使用頻度の全合計は273回、1人あたりの使用頻度は30.3回となっており、学習者の中で最も多く使用していた「留1」の16.4回の約2倍であることがわかる。

【表2】からは、JNSのA類の使用頻度は12.4回、B類は14.8回、C類は3回となっており、A類とB類は、学習者の中で最も多かった「留1」の約2倍となっているが、C類では同程度の使用頻度となっている。

JNSがA類で最も多く使用している接続表現は継起を表す「て形」（37回）で、付帯状況を表す「て形」（33回）、継起を表す「連用形」（22回）の順となっている。B類では理由を表す「て形」が37回で最も多く、「ので」は27回、理由を表す「連用」は23回となっている。C類では逆接を表す「が」の使用が11回で最も多く、並列の「連用」（6回）と並列の「て形」（5回）がそれに続いている。

#### 4-3. 学習者及びJNSの使用頻度が高かった接続表現

【表3】は、4-1の結果を踏まえ、学習者とJNSの使用頻度が高かった接続表現をまとめたものである。全接続表現数というのは、A類・B類・C類に分類された接続表現の全合計である。

【表3】 使用頻度が高かった接続表現：（ ）の前は頻度数、（ ）内は使用率を表す

		留1 (10人)	留2 (11人)	留なし (13人)	JNS (9人)
A	て (継起)	22 (32.3%)	23 (57.5%)	27 (42.1%)	37 (33%)
	て (付帯)	23 (33.8%)	10 (25%)	18 (28.1%)	33 (29.4%)
	連用 (継起)	0	0	3 (4.6%)	22 (19.6%)
	連用 (付帯)	0	0	2 (3.1%)	3 (2.6%)
	全接続表現数	68	40	64	112



		留1 (10人)	留2 (11人)	留なし (13人)	JNS (9人)
B	て (理由)	33 (46.4%)	36 (66.6%)	41 (51.8%)	37 (27.6%)
	ので	12 (16.9%)	0	6 (7.5%)	27 (20.1%)
	連用 (理由)	1 (1.4%)	1 (1.8%)	6 (7.5%)	23 (17.1%)
	全接続表現数	71	54	79	134

		留1 (10人)	留2 (11人)	留なし (13人)	JNS (9人)
C	が	10 (40%)	11 (52.3%)	8 (53.3%)	11 (40.7%)
	けど	6 (24%)	2 (9.5%)	2 (13.3%)	1 (3.7%)
	て (並列)	6 (24%)	1 (4.7%)	1 (6.6%)	5 (18.5%)
	連用 (並列)	0	0	1 (6.6%)	6 (22.2%)
	全接続表現数	25	21	15	27

A類の継起を表す「て形」の使用率は、「留2」が6割近くを占めており、次いで「留なし」が4割となっている。一方、「留1」とJNSは3割強で、「留2」「留なし」より低い使用率であることがわかる。

付帯状況を表す「て形」の使用率は、「留1」では3割を超えているが、「留2」「留なし」JNSでは3割弱となっており、ほぼ似たような使用率であることがわかる。

しかし、継起を表す「連用」を見ると、「留1」「留2」では使用されておらず、「留なし」でもわずかに使用されているだけであるが、JNSの使用率は約2割である。

B類の理由を表す「て形」は、「留2」「留なし」で5割を超える使用率であり、「留1」でも5割弱の使用率であるが、JNSでは3割弱の使用率となっている。「ので」の使用率は「留2」が0、「留なし」が7.5%と低い数値であるが、「留1」とJNSは2割程度となっている。理由を表す「連用」は、「留1」「留2」ではわずか1%の使用率であるが、「留なし」では1割弱、JNSでは2割弱の使用率となっている。

C類では、逆接の「が」が、どのグループでも4割以上となっているが、中でも「留2」「留なし」は5割を超えている。同じく逆接の「けど」は、JNSより学習者グループで使用率が高い傾向がうかがえる。並列を表す「て形」は、「留1」で2割以上、JNSで2割弱となっているが、「留2」と「留なし」では1割に満たない使用率である。同じく並列を表す「連用」は、学習者グループでは使われていないか、使われていたとしても非常にわずかな使用率である。しかし、JNSでは使用率が2割を超えていることがわかる。



## 5. 考察

4-1 及び 4-3 の結果によると、A 類では、どのグループの学習者も継起を表す「て形」と付帯状況を表す「て形」を多く使用していることがわかる。これは JNS と同じ使用傾向であるが、JNS では継起を表す「連用」も使われている一方で、学習者による使用は、「留なし」でわずかに使用されているだけである。この「連用」の使用は、B 類でも C 類でも同じ結果が出ている。つまり、JNS は「書く」という作業から、自然と書き言葉を選んだため、どの類でも「連用」の使用率が高くなっているが、大部分の学習者は書き言葉を使うことに不慣れであったか、使う必要性を感じなかったものと思われる。

また、使用率を比較すると、継起を表す「て形」は「留 2」と「留なし」が JNS よりかなり高くなっているが、「留 1」では JNS とほぼ同じ使用率となっている。このことから、「留 2」と「留なし」の学習者は、継起の「て形」で表そうとする傾向が強い、または継起の「て形」を使いやすい表現であると考えていることがうかがえ、JNS が使わないような場合 v でも、継起の「て形」を使用していることがわかる。しかし、「留 1」では JNS の使用率と似た数値を示していることから、短期の留学を経て一度は多用傾向にあった継起の「て形」が、1 年以上の留学によって JNS の使用率に近づく、いわば逆 U 字型の過程を表していると考えられる。

同じく使用頻度及び使用率の高い付帯状況を表す「て形」<sup>vi</sup>は、JNS の使用率を基準とすると、「留なし」が JNS とほぼ同じ割合に、「留 2」が JNS よりやや低く、「留 1」では JNS よりやや高い数値を示している。このことから、付帯状況を表す「て形」は、短期的な留学をすることで一度使用率が下がるものの、1 年以上の留学を経て再び元の使用率に戻るといふ、U 字型の過程を描いていることがわかる。

B 類の使用頻度及び使用率で最も多かったものは、理由を表す「て形」、「ので」、理由を表す「連用」となっており、理由を表す接続表現が非常によく使われていたと言える。しかし、それぞれの接続表現の使用率を比較すると、学習者による理由を表す「て形」の使用率は、JNS のそれと比べて非常に高くなっているが、理由を表す「連用」の使用率は、JNS では 2 割弱となっている一方で、学習者の使用は非常に少ない。この理由としては、前述したとおり、学習者側に書き言葉を使うという意識がなかったからということが考えられる。そして、「ので」の使用率は、「留 2」及び「留なし」では JNS よりかなり低い数値を示している一方で、「留 1」の使用率は JNS のそれと非常に近い数値になっている。これは、前述した付帯状況の「て形」と同じ U 字型の過程だと言える。

C 類では、「留 2」と「留なし」の逆接の「が」の使用率が半数を超えているが、JNS と「留 1」の使用率はほぼ同じである。しかし、逆接の「けど」の使用率は、「留 2」→

「留なし」→「留1」の順で上がっており、JNSの使用率より高い数値を示している。「が」と「けど」を合わせた使用率は、全学習者グループで6割を超えており、JNSの4割強の使用率と比べ高い数値であると言え、学習者が逆接の接続表現を多用する傾向がうかがえる。

並列を表す「て形」では、「留1」で2割強、JNSで2割弱となっており、似たような使用傾向を示しているが、「留2」と「留なし」の使用率は1割に満たない。これは、1年以上の留学経験を経た学習者が、JNSと同じように並列の「て形」が使えるようになったことを示唆している可能性がある。

同じく並列を表す「連用」は、JNSで2割強となっているが、「留1」と「留2」では使用が見られず、「留なし」でもわずかな使用率にとどまっている。このことから、JNSは並列の「連用」表現をよく用いていることがわかるが、「留1」を除く学習者は、並列の表現を使うことがほとんどないことがわかる。「留1」でも、並列を表す「連用」はまったく使用されていないが、これはA類及びB類でも指摘した、書き言葉に対する意識がなかったことが原因として考えられる。この点は、話し言葉である「けど」の使用率が高いことにも関係しているであろう。

以上の考察を以下の5点にまとめてみる。

- ① 付帯状況を表す「て形」と理由を表す「ので」の使用傾向は、「留なし」→「留2」→「留1」の順でU字型の過程をたどりながらJNSの使用傾向に近づく。
- ② ①の結果とは反対に、継起を表す「て形」は、「留なし」→「留2」→「留1」の順で逆U字型の過程を経て、JNSの使用傾向に近づく。
- ③ JNSが書き言葉を多く用いている場合でも、学習者にそのような使用傾向はあまり見られない。
- ④ 並列を表す「て形」の使用傾向が「留1」とJNS間で似ていたことから、学習者によるこの接続表現の使用は、1年以上の留学経験が影響している可能性がある。
- ⑤ 留学経験に関わらず、学習者は逆接表現を多用する傾向にある。

## 6. まとめと今後の課題

以上の結果から、本研究の研究課題を振り返ってみたい。本研究の研究課題は以下の2点であった。

- (1) 日本への留学経験がある学習者と留学経験がない学習者の接続表現の使用状況には、どのような共通点および相違点があるのだろうか。

留学経験の有無は、日本語学習者の日本語使用にどのような影響を与えるのだろうか？

(2) 学習者に留学経験がある場合、接続表現の使用状況はJNSのそれと似ているのだろうか。

(1) の共通点としては、学習者は書き言葉をあまり使用しないことと、逆接表現を多用する傾向があるということが挙げられる。一方、相違点としては、留学経験の有無や、その長さによって、接続表現の使用率が変化するということが挙げられる。

(2) は、学習者及びJNSが多用していた接続表現の一部において、その傾向が見られた。特に、留学経験が1年以上ある学習者は、JNSの使用率と似たような使用傾向を示していたといえる。

上記の研究課題以外に、本研究で明らかとなったことは、学習者による接続表現の使用の一部が、「留学なし」→「留学あり（1年未満）」→「留学あり（1年以上）」という順でU字型及び逆U字型の過程をたどり、JNSの使用傾向に近づいていたということである。つまり、学習年数がほぼ同じであっても留学経験が少なくとも1年以上あれば、JNSの使用傾向と似てくるという可能性を表しており、学習者が留学することの意義の一部を示したものだといえるのではないだろうか。

次に、今後の課題について述べる。

本研究では、留学経験の有無が学習者の接続表現の使用にどのような影響を与えるかを明らかにするため、量的な分析を行なった。そのため、学習者がどの場面で、どのような接続表現を使用していたのか、そしてその使用状況はJNSのそれと似ているのか否かといった質的な面での分析を行っていない。今後は、質的な側面も視野に入れた分析を行なう必要がある。

本研究の調査協力者である学習者の母語が韓国語であることと、少人数であることから来る限界もある。今後は、母語が韓国語以外の学習者を対象とした分析や、調査規模を広げた分析を行いたい。そして、留学経験の有無が学習者の日本語使用にどのような影響を与えるのかを明らかにするため、同一学習者の留学前と留学後の日本語使用を対象とした分析も行い、本研究の結果と比較していきたい。

## 後注

- i 日本語能力試験の1級または2級に合格している学習者は以下の通りである。日本への留学経験が1年以上ある学習者は3名（うち2名が1級、1名が2級）、留学経験が1年未満の学習者は2名（ともに2級）、留学経験がない学習者は2名（ともに1級）。
- ii JNS9名の出身地の内訳は以下の通りである。三重県出身6名、岐阜県、岡山県、沖縄県出身が1名ずつであった。
- iii 今回、誤用であると判断した接続表現は、A類が2つ、B類が9つであった。

- iv 「連用」は峯(2007)にはないが、本研究で使用したデータでは連用形が見られたため、「て形」の分類に準じた形で追加したものである。
- v 「留2」の学習者が書いた継起の「て形」(下線部で示す)の文の例は「ピングがなきながらいえにかえっておとうさんにいもうとがいなくなったといました」、「留なし」の学習者が書いた文の例は「いえにもどってじじょうをせつめいしています」である。どちらも同じシーンを説明したものであるが、これに類する文を「留2」では4名、「留なし」では5名が書いていた。一方でJNSは「ピングーと友だちが泣きながら家に帰ってお父さんにピングがいなくなった事情を話す」の1名だけであった。
- vi 付帯状況の「て形」(下線部で示す)では、次のような使用例が見られた。JNSは「ピングーとピングーの友人が、飛び箱になって遊んでいます」、「留なし」の学習者は「それでピングはピングを仲間外れにして友達と遊びました」という文を書いていた。

### 参考文献

- 孫 愛維(2005)「指示詞の学習過程におけるJSLとJFLの相違性:台湾人の日本語学習者を中心に」『言語文化と日本語教育』30、pp.118-121.
- 津留崎由紀子・中嶋敦子・金志宣・近藤彩・齋美智子・広田妙子(1997)「予測文法研究:後続文完成課題におけるJSLとJFLの予測能力について」『言語文化と日本語教育』13、pp.182-209.
- 東 会娟(2008)「中国人上級日本語学習者の縮約形の使用状況」『言葉と文化』第9号、pp.343-356.
- 峯布由紀(2007)「認知的な側面からみた第二言語の発達過程について -学習者の使用する接続辞表現の分析結果をもとに-」『日本語教育』134号、pp.90-99.
- 村上知栄子・塩見式子(2006)「上級学習者の口頭伝達能力に関する一考察—ストーリーテリングにおける日本語母語話者との比較—」『山口幸二教授退職記念論集』pp.291-330.
- Miyazaki Sachie(2010)Learners' Performance and Awareness of Japanese Listening Behavior in JFL and JSL Environments, Sophia Junior College Faculty Journal, Vol. 30, pp.23-44.
- Takamiya Yumi(2010)Pragmatic and Grammatical Awareness in Learners of Japanese: A comparison of JSL and JFL Environments, 『言語と文化』第23号、pp.91-136.